最終更新日：2022年9月2日

家庭科教育講座　中川 愛 准教授

育児未経験者の対乳児行動に関する研究

キーワード　乳児/　対乳児/　行動分析　/　音声分析

どのような研究をなぜ行っているか

私たちは、乳児にかかわる時、大人同士とは異なる特徴がみられることがわかっています。表情や話し方、声、体や手指の動き、諸行動のタイミングとリズムなどが様々に変化します。

これは、乳児が情報をできるだけ受け取りやすく、習得しやすいように大人が自分の表現行動を調整しているといえます。また、こうした行動は、模倣しながら成長する乳児にとって必要なことであり、育児行動にはなくてはならないものと考えられています。では、私たちは生まれもってそのような行動ができるのでしょうか。

乳児が好きであるという女子大学生に乳児をあやしてもらったところ、これまでに、乳児と接触経験をもった女子学生の方が多様なあやし行動を身につける可能性があることがわかりました。しかし、個人差もみられることから、乳児との接触経験以外の要因が関与していることも考えられました。

家庭観察の調査では、乳児きょうだいへの姉や兄の発話を分析すると、彼らの母親の発話を真似ている姿もみられました。養育者の育児語使用傾向には、養育者がもつ信念が関係することがわかっています。養育者の子どもへの願いがことばとなり、そのことばを聞いた姉や兄が、養育者と同じように乳児きょうだいに話しかける。養育者の信念がきょうだいすべてに伝わっていることがわかります。

近年の研究では、養育行動にかかわる親としての心や脳のはたらきは、経験によって発達し、また過去の経験や、親の心の特性などによって、「個人差」があることがわかってきています。私は、そうした個々の特性を理解するために基礎的な研究を続けるとともに、個々の特性にあった教育方法や介入方法を模索していきたいと考えています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

私の研究は、教育現場（小学校、中学校、高等学校等）で広く実施されている乳幼児との交流体験学習や、家庭科の保育分野における教材研究に貢献できると考えます。また、私はこれまで、多くの子どもたちとかかわる機会をいただきました。その中で、彼らがもつ彼ら自身の育つ力、可能性、その魅力などを感じてきました。目の前の乳児をどのように捉えて、どのようにかかわるか、これは、大人同士のコミュニケーションにも通じるところがあるように思います。私の研究は、ヒトとヒトとのコミュニケーションの基盤を考えることにもつながると考えます。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- 高等学校家庭部会研修会での講師
- 中学校、高等学校への出前講座・授業での講師　ほか
- 中川愛・松村京子（2010）女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い, 発達心理学研究,21（2）, 92-199
- 中川愛（2012）児童の乳児きょうだいへの発話に関する研究－家庭観察データからの検討－ ,教育実践開発研究センター研究紀要,21,139－147　ほか

奈良教育大学　教育研究支援課 学術研究推進係 0742-27-9135　g-kenkyu@nara-edu.ac.jp